
49 番目

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

49 番目

【Nコード】

N 3 1 2 6 Z

【作者名】

蒼

【あらすじ】

聖戦という悲しみの世界で造^うまれてきた主人公の鈴蘭^{すずらん}は、仲間と好きな人と 兄に出会い、自分がこの世に造^うまれてきた意味を知っていく。兄妹の絆と恋愛と仲間の大切さと少しだけギャグありのお話です。

プロローグ（前書き）

基本原作沿いになるかと思っています。あでもオリジナルストーリーがちょこちょこ入るので少しでも原作壊します・・・。

プロローグ

仮想19世紀末・・・

世界の終焉を目論む「千年伯爵」とイノセンスに適合したエクソシスト達の戦いの中で。

私は 造^うまれてきた。

最初は ただ何のために造^うまれてきたのかなんてわかんなかったけど・・・

今ならわかる。

私は、きつとみんなと 彼と お兄ちゃんに会うために造^うまれてきたのだと。

もしそうだとしたら・・・

私は もう少し・・・この悲しみの世界で生きていけるかもしれないね。

「おい 鈴蘭ーっ」

彼が 私の名前を呼ぶ声がした。

『なあに？ ラビ』

だから私も彼の名前を呼んだ。

プロローグ（後書き）

プロローグ 意味わかんねえよって思われた方 すいません・・・。
きつと 話が進むとわかってきますのでお楽しみにっ

鈴蘭 主人公が恋するのは、ラビの予定です。たぶんこれは変更されないと思います。

第1夜 主人公紹介（前書き）

このお話の主人公の紹介をしたいと思います

第1夜 主人公紹介

すずらん
鈴蘭

黒の教団エクソシスト。15歳の女の子。アスパラガスが食べれない。

イノセンスは鎖。

5歳の時に親に捨てられクロス元帥に拾われ今まで育ててもらっていたらしい。

そのため、クロス元帥の事を父親のように思っているが、師匠としてのクロス元帥は存在自体が理解出来ないくらいに嫌っている。

アレンよりも前にクロスに弟子入りしている。

どうやら ノアに身内がいるとか いないとか・・・

千年伯爵は 鈴蘭が欲しいらしい。理由は 鈴蘭の過去にあるとか。

ぎんらん
銀蘭

15歳の少年。鈴蘭とよく顔が似ているが何者がよくわかっていない。

鈴蘭は どうやら彼の事を知っているみたい。

自由奔放で単独行動が多く未成年なのに酒を飲み、タバコを吸い目上の人にも態度を改めず 周りに迷惑をかける所は

どこかの赤毛で長髪、酒好きの女好き元帥にどこことなあく似ている。

い。

クロス元帥とはかなり仲は悪いものの昔からの知り合いらし

そして千年伯爵ともお知り合いの様子。

性格は基本クロス元帥にそっくりだが、自分を犠牲にしま
で一人の人を守ろうとしている。

第1夜 主人公紹介（後書き）

主人公はこんな感じです。みなさんに気に入ってもらえると嬉しいです。

鈴蘭の嫌いな食べ物をアスパラガスにしたのは発音的に鈴蘭が嫌いそうだったからです。なので得に意味ないです。

みなさん 銀蘭の事嫌いにならないであげて下さい・・・っ。彼未成年でお酒飲んだりしてて性格悪そうだけど、本当は良い奴なんですっ！！（まだ 話進んでないから彼の事詳しく書けないのが悔しい・・・。）

お話進んだら 良い奴だってわかりますよー。

第2夜 旅立ち（前書き）

鈴蘭 クロス ラビ この3人の視点で書かれています。少しキャラ崩壊アリ・・・かも？
それでもいい方 読んでください

第2夜 旅立ち

小さな村にある駅で 淡い甘栗色をした長い髪の少女と癖のある赤毛を無造作に伸ばした男性が列車を待っていた。

「鈴蘭。^{すずらん}」

赤毛の男性に呼ばれ 振り返るこの少女こそ このお話の主人公である。

「なんですか？師匠。」

そして 鈴蘭に師匠と呼ばれたこの男性の名は “クロス・マリアン”

女好きで無類の酒好きな性格で そして鬼。鈴蘭はこの人の鬼のような性格にとことん困らされた。

「もうすぐ 列車がくる。」

遠くのほうから汽笛が鳴ってるので 目的の列車が近づいていることは鈴蘭もわかっていた。

「・・・それが どうかしたんですか？」

幼い頃に 捨てられていたところを拾われてから私は彼にずっと育てられてきた。

・・・長い 付き合いなのだ。

ここまで育ててきてもらった父親のような存在の彼と。

そして 鬼のような性格でイノセンスの扱い方についてかなり厳しく教えてくれた師匠の彼と。

だから なんとなく嫌な予感がした。

「お前は今ここで 俺達が列車を待つてる理由・・・わかってるよな？」

師匠としての彼が 不敵な笑みで私を見る。

『正式にエクソシストと名乗るために 師匠と一緒に本部に挨拶に

行く……んですよ？」

つい最近 やつと自分のイノセンスというアクマを倒す力を扱えるようになり。

師匠にエクソシストと名乗っていいと言われ 今に到っているわけなのだが。

どうしよう 絶対に今から何かが起こるって！

なんか 私の身に現実じゃ起こっちゃいけないようなコトが起きちゃう気がすごいするよ！？

「よくわかってるじゃねえか。……お前 本部の場所は知ってるよな？」

私は 身の安全を確保するため師匠から一步後ろへ下がりと距離をとった。

「……なんとなく なら知ってますけど……」

すると 師匠は懷から物騒なものを取り出した。

「……なんでだろう……？これから先 自分の身に起こることが最悪なことな気がしてならないよ？

杞憂であってほしいなあ。いや、そうであってくれ。

「お前のなんとなくはアテにならん。……鈴蘭が今持ってるカバンに本部の地図とプレゼントを入れた。コムイという幹部にも紹介状を送りつけといたから……」

師匠が物騒なものを振り上げて歩み寄ってくる。

どうやら 杞憂ではないみたいだ。

「一人で 本部まで行け。」

「え ちよつと待ってっ！一緒に行ってくれるんじゃないんですか！？つか バックレるつもりでいるでしょう師匠！！」

「俺がお前と一緒に本部に行くとも思ったか？」

「……あ 一緒に行ってくれないんだ。だから師匠旅行カバン持ってたかったんだね。なんでカバン持っていないのか今 その理由がわかったよ。」

「なんで一緒に行ってくれないんですか！？なにかよっぽどの理由

とかあるんですかつ!？」

師匠が一瞬 物騒なものを振り下ろす手を止めた。

・・・そのまま時間よ止まってくれ。時をかける 女並の電車の踏み切りにチャリで突っ込むくらいのチャレンジなら私出来るから! ！つかやらせて下さい! そんな無謀なこととして時間が止まる・・
・戻れるなら万々歳じゃあございせんかつ! !

「よっぽどの理由・・・?」

師匠の目が光る。物騒なものが再び私に向かって振り下ろされる。

列車が近づいてくる。・・・あの列車 ヘタしたら天国行きになっちゃうじゃん。

「俺 本部 あそこ キライなんだよ」

ぶおっ と物騒なものが勢いを増し ゴツと鈍い音をたて私に当たる。

そこで 私の意識は途切れた。

列車がホームに止まり ドアが開く。

俺は、地面に倒れている鈴蘭を担いだ。

「・・・悪かったな。こんなことして。」

弟子としてではなく、今まで育ててきた娘のような存在の鈴蘭に俺らしくはないと思いつつも謝罪の言葉を言う。

まあ・・・こいつの意識は 俺が先ほど殴った衝撃でないだろうが。

「それでも、アレンの時より軽く殴ったんだからな。」

そう言いながら列車の中にカバンと共に放り込む。

それと同時に列車のドアは閉じ ガタン、ゴトン・・・と進んで行く。

俺は 鈴蘭が乗った列車が見えなくなるとホームを後にした。

「そろそろ起きんか“ラビ”」

今回の任務の同行者であり、自分の師匠でもあるブックマンに叩き起こされた俺の名は“ラビ”

「んー・・・？もうちつと寝さして・・・」

そういうと、思いつき蹴られた。

痛えなこのパンダジジ　・・・口に出すと怪我が増えるので言わないが。

「もうすぐ教団に着く。・・・眠気が覚めんのなら　列車内でも歩いて来い。」

確かに今の俺は眠気が覚めず、このままでいるとまた寝そうだった。

「んじゃー　ちょっと歩いてくる。」

まだ朦朧とする頭で俺は用意されていた個室を出て行った。

まさか　この列車であいつに会おうなんて思ってもなかった。

ここから　運命の歯車は回り初めたんだと俺は思う。

第2夜 旅立ち（後書き）

・・・長かった。ホントに長かった。こんなに長いのも初めて書いたよ。

ここまで長い最後まで読んで下さってありがとうございます！

ギャグに近いの書くと鈴蘭のキャラが崩壊することが判明。

本当はもうちょっと女の子らしい性格してます。 本当はね。

今回 時をかける 女のネタ書いてて思ったんですけど 時をかける 女って

時間をとめるのか 戻すのかわかんなくなっただんですよ（なら使うなよ。 って感じなんですが使いたかった）。

私 時をかける 女の内容 おおまかにしか覚えてないので・・・。

母親に聞いた所 時間を戻すだっただけ という返答が来たのですが「だっただけ って曖昧な。」と思い信じるに信じれず。

実際 どっちだったか覚えている方、よかったら感想の所に書いて教えて下さい

第3夜 出会い（前書き）

なんか シリアスっぽくなっちゃったかな？って書き終えて思っちゃったり。

個人的にそう思っただけなので 気にせず読んで下さい

・・・この話書いてたとき 雪降ってたんですよ。軽く積もってました。

第3夜 出会い

俺は 列車の中を歩いていた。

そして 列車の入り口近くで・・・

ふみよ

『・・・？』

何かを踏んだ。

俺は 何かがあるであろう足元を見た。

「ん・・・師匠の・・・鬼・・・」

どうやら 俺が踏んだモノは白いワンピースを着た淡い甘栗色の髪の少女だったらしい。

『・・・』

しばらくの間 思考が止まってしまふ。

うん だつてさ。少女が列車の入り口で倒れてるんさよ？

いや まずそこからしておかしい？

『つて！！俺女の子踏んだ！この子の事踏んださああ！！』

たぶん俺が踏みつけたことで女の子は怪我をしてるだろうと思い俺は女の子を起こす。

『ダイジョブさ？どうか怪我とかしたさ？』

「怪我？はしてないので・・・安心して下さい。」

女の子に怪我がないことがわかってとりあえず安心していたらなぜか女の子が俺のコートをじい・・・っと見ていた。

「・・・あの、そのコートの胸にある紋章・・・ローズクロスですよね？」

『そうだけど・・・これがどうかしたさ？』

いつもなら 疑うハズなのに。

AKUMAかもしれないと 警戒しなきゃいけないのに。

なぜか この女の子には疑うことをしなかった。警戒することもし

なかった。

・・・なぜ？

任務終わりで気が抜けてたのか？

もうすぐホームに帰れると どこかで油断していたのか？

・・・違う そんなことじゃない。

じゃあ どのような理由でこの女の子を疑わなかった？警戒しなかった？

・・・そんなこと 女の子（鈴蘭）と出会ったばかりの頃の俺に問い詰めたって答えなんて出やしない。

これは 後々にわかることだから。

でも 今わかることは・・・

『・・・（初めて会った気がしないさ・・・。）』

初めて会った気がしないことと どこか共通点があるような気がすることの2つだけ。

「あのー・・・？おい・・・？」

どうやら長いこと考えていたらしく 話しかけても返事をしない俺に対して不思議に思ったのだろう。声をかけてくる。

『ごめんさ ちょっと考え事してた。・・・んで？このローズクロスがどうしたんさ？』

「あの だからアナタはエクソシストさんですか？って・・・さつきから聞いてただけだ・・・違いましたか・・・？」

『いんや。違わないさあ。・・・俺は黒の教団のエクソシスト。・・・キミは？』

俺が尋ねると 女の子は立ち上がって頭をペコリと軽く下げた。

「鈴蘭と言います。黒の教団に用があつて来たの。」

黒の教団に用があるって珍しいこともあるものだ・・・なんて考えながら俺も自分の名を言う。

『俺の名前はラビ。・・・よろしくさあ。』

自然と鈴蘭と目が合って 笑いあう。

これが 俺と鈴蘭の出会いだった。
出会い方としてはちょっとアレだったけど、でも まあ・・・
今思えば 俺等らしいっちゃあらしい出会い方だったよな。

第3夜 出会い（後書き）

今回は ラビ視点にしてみました。どうだったでしょうか？
前回よりは短くなるようにがんばりました・・・。

次回はたぶん ぱんだ・・・失礼。ブックマンが出てくる・・・かな？

（早く 銀蘭を登場させたくてたまらない蒼です。短編書こうにも銀蘭の正体がわかつちゃうので書けず・・・）

『くそお 銀蘭のばかやろう！！』

「・・・俺に八つ当たりされても困るっつーの・・・」

なんか 出番ないとかわいそうなので後書きと前書きでこれから銀蘭ちゃんと会話したいと思います。

『だって 彼 一応このお話の主人公だし。主人公が出番ないとちよつと哀れじゃないか。』

「・・・哀れと思ってんなら早く話進めたらいいだろ・・・。」

・・・まあ 次回もお楽しみにしてくださいっ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3126z/>

49 番目

2011年12月16日19時07分発行